

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01189

研究課題名(和文)近世中期復古神道形成過程の史料的研究

研究課題名(英文)Historiographical Study of the Formation Process of Restoration Shinto in the Middle Early Modern Period

研究代表者

松本 久史(Matsumoto, Hisashi)

國學院大學・神道文化学部・教授

研究者番号：20365513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,600,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀前半期の荷田派の諸活動を史資料に基づいて実証的に考察することにより、「復古神道」の形成プロセスを明らかにした。その過程で、むしろ近世期全般にわたる「神道の復古」の思潮が様々な立場からの神道の復古への希求を促したこと、そのなかで、18世紀に新たに勃興した国学による文献実証的手法による依拠すべき古典の確定の作業から復古神道は形成されていったことを明らかにした。本居宣長などによる18世紀後半期以降の反儒教・反仏教の立場からの「固有の神道」という主張は、先行する古典実証を基盤としたものであり、かつ、それ以外の多様な復古の流れは並行して幕末期まで継続していることも示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

18世紀前半期における荷田派の諸活動の実証的な検証により、「復古神道」の概念の再検討を提起したことは、単線的な発展過程でとらえられがちであった近世神道の史的展開の再考を促すことになる。そのことは、ややもすると近代において成立した「神道」概念や神社理解から照射され、理解されてきた近世神道の見直しへの契機となった。

多様な「神道の復古」の時代と、近世期の宗教状況を捉えたことによって、神社神道にとどまらず、民間・民俗神道との関係性、仏家神道への注目など、広く近世の宗教から神道を捉えなおそうという視座が獲得され、近世宗教史のみならず、近世史全般の再理解の必要性を示唆した。

研究成果の概要(英文)：By empirically examining the activities of the Kada school in the first half of the 18th century based on historical documents, the formation process of "Restoration Shinto" was clarified. In the process, it was clarified that the thought of "Shinto revival" throughout the early modern period encouraged the desire for the restoration of Shinto from various standpoints, and that Restoration Shinto was formed from the work of determining the classics that should be relied on by the literature-empirical method of Kokugaku, which newly emerged in the 18th century. The assertion of "inherent Shintoism" from the standpoint of anti-Confucianism and Buddhism from the latter half of the 18th century onwards by Norinaga Motoori and others was based on the preceding classical demonstrations, and also suggested that various other trends of restoration continued in parallel until the end of the Tokugawa shogunate.

研究分野：近世神道史

キーワード：復古神道 荷田春満 神道思想 神仏関係 近世中期

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「復古神道」とは、神道史理解のため、大正期頃から使用される近代的な用語である。その対象とする範囲は、研究者によって異なり、国学の「四大人」を中心とした国学者の神道思想に限定されたものから、神社・神職だけではなく、草莽の民衆層の社会的活動を含むものまでまちまちである。復古神道研究の現状の課題は二つの点で、研究代表者がかつて指摘した近世国学研究の問題点と重なり合う(松本久史『荷田春満の国学と神道史』弘文堂 平成 17 年)。すなわち、研究の関心が思想内容の分析や比較の段階に止まっていること、対象範囲が篤胤以降の 19 世紀に偏っていることである。近世神道史上の復古神道の意義を明らかにするためには、こうした研究の空白を埋める必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、荷田派国学の思想とその社会的実践の展開を構造的に分析することにより、18 世紀前半期に復古神道が形成されていく過程を解明し、近世神道史の中に位置付けることにある。そのために具体的には 3 つの分野ごとに課題を設定し、その相互関係を考察する。すなわち、荷田派による神道古典の再発見・解釈、朝廷・幕府の寺社政策・国家的祭祀儀礼の再興と稲荷社の関係、神職・宗教者・学者の人的ネットワークとその活動である。

3. 研究の方法

～ の分野は共通して史資料調査 データ化と分析 考察のプロセスを設定し、課題の究明を遂行していく。

荷田派による神道古典の再発見・解釈 テキスト

荷田派の神道説の中心となる『日本書紀』・『古事記』・『延喜式祝詞』等の古典テキスト解釈に基づき、神道説の内容を精査・再検討し、垂加神道などの前時代、および宣長・篤胤等の神道説との差異・特徴を明らかにする。

朝廷・幕府の寺社政策・国家的祭祀儀礼の再興と稲荷社の関係 制度

吉宗政権の祭儀儀礼研究や朝廷祭儀の復興と、春満の養嗣子、荷田在満の祭祀儀礼研究との関連を、東羽倉家資料および田安家史料などの分析により明らかにする。さらに、稲荷社内の神仏関係訴訟や勅使奉幣関係史料の分析を進め、稲荷社の由緒や祭神等に関する神道説への影響を考察し、復古神道発生の際としての稲荷社の歴史的な位置づけを明らかにする。

神職・宗教者・学者の人的ネットワークとその活動 社会実践

荷田派と交流した全国の神職や僧侶、儒者との関係を、日記・書簡等関係資料の記述、さらには和歌会など文芸活動にも注目して実態を調査し、関係する神社(大神神社・吉備津神社・猿投神社等)の現地資料調査を行い、相互の人的ネットワークの実践活動を分析する。それによって、復古神道の実践活動や神道説受容・普及のプロセスを明らかにしていく。

4. 研究成果

まずは、開始年度当初より、新型コロナウイルス流行により、史資料調査の実施等に大きな困難が生じたため、研究目的を達成すべき有効な方法についての検討を行った。その過程において、研究史の理論的検討を通じて、前提となる「復古神道」概念自体の自明性の可否が、検討を要する課題として浮上してきた。これは、代表者・分担者が同時並行的に行ってきた国学研究の通史的研究の再検討とも密接にかかわっている。これは、復古神道が国学の研究方法をベースとした神道説であるためである。そもそも、国学自体が「国学四大人」(荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤)により、単線的に発展していったのではなく、他の学問領域とも深く関わりながら複線的な多様な発展形態を持っていたことを明らかにしていく中で、当然のように「復古神道」も単線的な発展ではない、同様の展開を見せたのではという仮説を構築し、それを実証していくことにより、研究目的の達成を図った。

(1) 定期研究会における検討と学会発表・論文公開による新知見の提示

上記のような仮説を具体化していくための作業として、分担者・協力者の参加する定期研究会を感染防止の観点等から ZOOM を用いた遠隔方式を主として実施することとした。初年度の研究会で交わされた議論において、現在「神道古典」と称される古典籍に関する荷田派のアプローチにつき、諸国の『風土記』・『古語拾遺』に注目した分析・検討が必要であるとの共通認識を得た。これは、単なるテキスト分析にとどまるものではなく、荷田派のネットワークから神職・儒者・神道家との関係性を深く探求することによって、「復古神道」への展開につき、新たな新知見が得られるのではという展望を得た。

次年度は、定例研究での意見交換を継続して、学問・文芸にわたる荷田派の活動実態を明らかにすることだけでなく、学会発表・学術誌等への論文掲載など成果公開にも努めた。通史として

の国学史の検討を進め、国学自体の多様性にも注目して、国学を基盤とした「復古神道」概念も再検討すべきであるとの問題提起を行った。当該期の実態調査の成果による学的・人的ネットワークの解明は、従来の研究カテゴリーの再検討をも促すという、学説史上の新たな提起を行ったものである。なお、研究代表者は令和4年3月には分担研究者とともに、社会人・大学生を対象とした一般的な概説書として、國學院大學日本文化研究所『歴史で読む国学』（ペリかん社）を編集・刊行しており、通史で国学を論じるという新たな試みにそれらの成果が活用されている。

最終年度は、それまでの成果を踏まえて、学問・文芸にわたる荷田派の活動実態を明らかにすることと並行して、引き続き学会発表・学術誌等への論文掲載などの場を通じて、昨年度に提起した国学の多様性との連動性について、国学を基盤とした「復古神道」概念も「神道の復古」という視点から検討すべきであるという問題提起を行った。研究代表者・分担者・協力者によって、特に総括的なパネル発表「荷田派の「復古神道」とその展開」を行い（神道宗教学会第76回学術大会）17世紀後半期から、垂加神道から仏家神道までを含んだ、神道の規範とすべき古典群の考証・追究という営みが各々進められていく中で、同時並行的に春満の学問が展開したことや、当該期の人的ネットワークの実態調査の成果により、春満の学問を受容した神社の神職たちが古典学修を梃子として神社の「復古」を図っていくことなどを明らかにした。そのほか、稲荷社に関連する史料翻刻・分析の結果が論文化され、17世紀後半期から神社という場を中心とした「神道の復古」という潮流が、18世紀前半期に国学という新たに勃興した学問と結合することにより、「復古神道」が生成されていったという結論を導き出した。

（2）史資料の調査および翻刻・分析

昭和期刊行の『荷田全集』第6巻所収『日本書紀神代巻笥記』につき、東羽倉家文書の原典と照合して再校訂を行い、活字史料と原典における表記・用字に大きな差異があることを明らかにした。また、文芸史料としては伏見稲荷大社の和歌史料の翻刻に着手し、春満高弟の大西親盛の和歌学習に関しても、日記史料などからの検討を進め、国学者にとどまらず、冷泉家など堂上派との交流の事実を明らかにしている。『神代巻笥記』や稲荷社関連歌会史料の翻刻により、稲荷社を中心とした学問・文芸ネットワークの実態を明らかにすることができた。その過程において、堂上歌人の冷泉為村の作歌活動の分析から、従来為村作と考えられていた和歌の過半が、御所における歌会の書留であったことが判明することなど近世文芸研究に対する新たな知見も得ることができた。

（3）現地史資料調査の実施による新知見

史資料調査については、新型コロナウイルスによる行動制限が一部緩和された令和3年度下半期から4年度にかけて、高知城歴史博物館・オーテピア市民図書館・高知大学図書館に所蔵される、谷垣守関連史資料の包括的な調査を実施した。対象を選定した理由は、垣守は垂加神道家の谷秦山の子であるにもかかわらず、春満の流れをくむ荷田在満・賀茂真淵の両者に入門していることから、垂加神道から復古神道への移行関係を解明するためのキーパーソンであると考えられたためである。調査の結果、和歌・律令の分野において荷田派の成果が多く受容されていることが明らかとなった。それだけでなく、垣守は、神道に関する当時の新知識を得るために、春満のほかにも吉見幸和・多田義俊などの同時代の神道家の著述の蒐集に努めたことや、媒介者として古典を集積・貸与した、萱生由章や山本広満といった、頂点的な学者ではなく、ほとんど研究の対象にもならなかった人物の精査の重要性が明らかとなった。

他にも、さらなる春満門人のネットワーク解明のため、令和4年度には根本胤満関係の史資料調査を千葉県市原市飯香岡八幡宮、諏訪下社大禰宜の桃井保教関連史資料の調査を諏訪市立博物館にて実施した。

これら史資料調査の結果は、垂加神道など、先行する神道説も、ともに「神道の復古」を目指し、依拠とすべき古典に基づいて神道説の更新を図っていたこと、その古典を確定すべき作業のせめぎ合いがあり、復古神道は勃興した国学を援用し、新たな神道説を構築しようとしていたことが明らかとなった。

上記（1）から（3）までの結果、18世紀前半期復古神道への移行は、先行する儒家や仏家神の神道説を全面否定・断絶して生起されたものではなく、これらとの競合関係・相互影響のなかで、徐々に成立したものであること、本居宣長以降の復古神道による儒仏を否定した主体的な「古道論」成立は、先行する荷田派による依拠すべき神道古典の確立に基づくことにより、初めて可能となったことを示し、復古神道の発展的展開を史資料から実証的に明らかにすることができた。

同時に、近世学術としての国学の多様性を明らかにしたことに伴い、復古神道においても、その復古の目標の多様性が想定され、一つの復古ではなく、多様な復古へのアプローチが近世神道には存在したことを示唆し、新たな視点による近世神道研究の分野を開拓した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松本久史	4. 巻 17
2. 論文標題 荷田春満門人神職の思想と行動－根本胤満を例に－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 國學院大學研究開発推進センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古相正美	4. 巻 66
2. 論文標題 江戸時代御会和歌と「冷泉為村卿御歌集」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 朱	6. 最初と最後の頁 114 125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早乙女牧人	4. 巻 66
2. 論文標題 史料紹介 伏見稲荷大社蔵「稲荷社月次御法楽和歌」（二）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 朱	6. 最初と最後の頁 126 162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村明裕	4. 巻 13 - 3
2. 論文標題 荷田春満のアクセント資料における第一種表記法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 13 734
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一戸渉	4. 巻 10
2. 論文標題 上田秋成と橋本経亮	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アナホリッシュ国文学	6. 最初と最後の頁 114 123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 121 2
2. 論文標題 「赤気」と近世社会－明和七年の「赤気」をめぐる人々の対応と認識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早乙女牧人	4. 巻 65
2. 論文標題 史料紹介 伏見稻荷大社蔵「稻荷社月次御法楽和歌」(一)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 朱	6. 最初と最後の頁 93 123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上島亮平	4. 巻 65
2. 論文標題 落穂 近世稻荷社と胞衣納	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 朱	6. 最初と最後の頁 299 302
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮部香織	4. 巻 25
2. 論文標題 【叢説】律令を歌に詠む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法史学研究会会報	6. 最初と最後の頁 1 - 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一戸渉	4. 巻 52 12
2. 論文標題 「炎上」する江戸の言説空間－宣長・秋成と到底間の「偽書」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 91 98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一戸渉	4. 巻 55
2. 論文標題 稻荷祠官大西親盛の和歌続々	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 斯道文庫論集	6. 最初と最後の頁 119 153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤公太	4. 巻 12
2. 論文標題 垂加神道と国学：その関係をめぐる研究史	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 71 79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松本久史
2. 発表標題 近世中期の神道史再考 神道の復古か復古神道か
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本久史
2. 発表標題 春満門人の神職の展開とその活動
3. 学会等名 神道宗教学会第76回学術大会 パネル発表 荷田派の「復古神道」とその展開
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤公太
2. 発表標題 松下見林の古典研究と「復古神道」
3. 学会等名 神道宗教学会第76回学術大会 パネル発表 荷田派の「復古神道」とその展開
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木健多郎
2. 発表標題 近世遠江の国学における『日本書紀』研究と荷田春満
3. 学会等名 神道宗教学会第76回学術大会 パネル発表 荷田派の「復古神道」とその展開
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本久史
2. 発表標題 復古神道形成過程における古典認識
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本久史
2. 発表標題 古典觀の轉換と復古神道
3. 学会等名 神道宗教学会第75回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤公太
2. 発表標題 松下見林の古典研究 『古語拾遺』を中心に
3. 学会等名 神道宗教学会第75回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木健多郎
2. 発表標題 荷田春滿の「神祇道德」説の再検討 谷垣守『神代卷速別草』との比較を通して
3. 学会等名 神道宗教学会第75回学術大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 國學院大學日本文化研究所	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ペリカン社	5. 総ページ数 272
3. 書名 歴史で読む国学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡邊 卓 (Watanabe Takashi) (10726011)	國學院大學・研究開発推進機構・准教授 (32614)	
研究分担者	一戸 渉 (Ichinohe Wataru) (20597736)	慶應義塾大学・斯道文庫(三田)・教授 (32612)	
研究分担者	星野 光樹 (Hoshino Mitsushige) (20616883)	國學院大學・神道文化学部・准教授 (32614)	
研究分担者	根岸 茂夫 (Negishi Shigeo Shigeo) (30208285)	國學院大學・文学研究科・名誉教授 (32614)	
研究分担者	古相 正美 (FurusouShigeo Shigeo) (30268966)	中村学園大学・教育学部・教授 (37109)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高塩 博 (Takashio Hiroshi Hiroshi) (40236211)	國學院大學・法学部・名誉教授 (32614)	
研究分担者	齋藤 公太 (Saitou kouta kouta) (40802773)	神戸大学・人文学研究科・講師 (14501)	
研究分担者	白石 愛 (Shiraishi Ai) (60431839)	東京大学・総合研究博物館・特任助教 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関